

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『自転車泥棒』における多言語的エクリチュール
Author(s)	李, 郁恵
Citation	アジア社会文化研究 , 21 : 29 - 53
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/49057
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049057
Right	
Relation	



『自転車泥棒』における多言語的エクリチュール

李 郁蕙

1 研究の背景と目的

台湾の多言語状況は、多くの先行研究で指摘されているように、時期によって異なる様相を呈している。戦前では、日本の「国語」教育の実施を背景に漢文及び台湾語文の「クレオール化」(陳 2012)、日本語の「台湾方言」化が見られる(安田 2011)。一方、戦後では中国国民党政権の「国語」運動の下で中国語の一元化が推進され、公の場で台湾語や客家語、原住民諸語などに対して優越的地位を独占した(菅野 2012)。そして、「本土」意識が台頭した昨今、母語教育義務化や放送言語多様化が進み、共生のあり方を体現したモデルとして注目されている(林 2009)。本稿は、それぞれの時期特有の様相が文学作品の中でどこまで反映されているかという関心に基づくものである。例えば、書く言語の選択、会話場面の設定、発話内容の表現など、いずれにおいても同時代の言語政策の影響による多言語性、あるいは逆に一言語性をうかがわせる手がかりが多くあると考える。これを踏まえた一つの試みとして、台湾国内外で華々しい受賞歴を持つ作家呉明益が 2015 年に発表した『自転車泥棒』を対象に、長期にわたる単一言語主義から解放された最新の状況について考察することにした。

『自転車泥棒』の中国語原題は『單車失竊記』である。1948 年公開のイタリア映画『Ladri di Biciclette (英題: The Bicycle Thief)』の翻訳タイトルを使うことや、テキスト内でも言及していることから、同映画を強く意識した作品だと思われる¹。あらすじを簡単に紹介すると、主人公「ぼく」の家は自転車盗難に 3 度遭ったうえ、約 20 年前に父親が自転車に乗って失踪してしまう。父親は最後まで行方不明のままだが、自転車は「ぼく」による執念の追跡の果てに見つかる。その過程で「ぼく」はさまざまな人と出会い、自転車をめぐるさまざまな時代のさまざまな思い出を聞かされる。どれをとつ

てもれっきとした一つの家族史であると同時に、台湾に集う人々の物語、ひいては台湾の近代史そのものといっても過言ではない。題材の重さにもかかわらず、視点を変えながら軽快に描くことから、初版刊行以来、数々の選書フェアで好評を博してきた²。中でも最も紙面を賑わしたのは、2018年に台湾文学として初めてブッカー国際賞第1次ノミネート作品に選ばれたことである³。このように近年を代表する人気作家の話題作を通して、時代の波をくぐり抜けた台湾という多言語空間の表象のされ方を明らかにしていきたい。

2 多言語使用の試み

英訳版の『The Stolen Bicycle』を手掛けたステルク・ダリル (Sterk Darryl) は、翻訳にあたって一番難しいが面白いところをこう振り返る。

この作品には、特に主人公の母親の発話に台湾語がたくさんある。作者はそれらを漢字とアルファベットと2つの方法で表記する一方、自分が話さない原住民の言語に対する敬意を示すため一部分のツォウ語をアルファベットによって書き入れている。いずれも実際どんな音声だったのかをわれわれに思い起こすためと思われる。英語は当然アルファベット表記だが、日本語とほとんどのツォウ語は中国語に変換されている。そういう奇妙な仕組みをまねて私も英語表記を面白くしてみた。もっとも、たいていの場合、私は単に文字を「文字どおり」にただけなのだ⁴。

原著では中国語のほか、台湾語やツォウ語、日本語など複数の言語が漢字やアルファベットの形で混在している。その状況をアルファベットしかない英語でいかに再現するかがスタルクにとって最優先課題であった。結果的に書体の変更やウェード・ジャイルズ式綴字法の採用などで文字を際立たせるといった方法にたどり着いたものの、作品の多様なメッセージ性を過不足なく伝えるまでにはまだ遠いという⁵。

一方、日本語版の訳者である天野健太郎は、同じ点について次のように触れている。

著者の後記にあるとおり、本テキストには主なテキストの中国語以外に台湾語、原住民族の言葉が多く用いられて、その一部はアルファベットの発音表記を補うことで、翻訳の安易な「等価性」を回避し、原語の音感の美しさを読者に感じさせるほか、同音ないし類音異義語を区別する現実的な機能で意味を確定させている。ただ、日本の翻訳出版ではマイナ言語であり、読者へのハードルが高い中日翻訳において、なお多言語を保持することで読みやすさが失われる懸念がある「方言の翻訳」だが、日本語文脈は、カタカナという表音記号を日常に使える（言語武器がひとつ多い）いっぽう、「漢字」を使うことで、「多言語」が権力によって特定の意味へと縮小する恐れを回避できない（同「字」異音語・異義語で混乱する）。

いずれにせよ、著者の新しいトライアルに、音の違和感程度でしか広えられなかったのは、率直に言って訳者の力不足である⁶。

日本語の場合、発音を表記するのにカタカナやルビといった便利な手段がある反面、漢字に同形異音語・異義語が多いため、発音を特定することは難しい。それらを適宜取捨選択して元の表現に見合うよう配慮しつつも、「圧倒的な『野生』たる」⁷原作の趣旨に応えきれないと天野は口惜しさをにじませる。

以上二人の訳者のあとがきから、この作品をめぐる翻訳の困難さ、具体的には、多言語使用が特色の一つをなすとともに、英語なり日本語なりに翻訳される時はもとより、中国語原文の読者にとってもページをめくっていく上でちょっとした壁になっていることが分かる⁸。むろん、作者自身も「哀悼さえ許されぬ時代を」と題した作品後記でわざわざ取り上げたぐらいこの点を十分に意識している。

一点、説明が必要なのは、本書の多くの箇所で「多言語表現」を取り入れていることだ。執筆のなか、どうしたら読者のみなさんに物語に入り込んでもらえるか、そしてまた同時に、言語の本質にある魅力を感じ

取ってもらえるか、ずっと考えてきた。結果、理解しにくい、あるいは特殊な単語・フレーズは標準的な「音」で表記することにした。これなら読者は先ず文字から異なる言語の意味を咀嚼しうるうえに、最後はその音感までも感じ取って、口にしてくれるのではないか。言語はコミュニケーションの道具というだけでなく、本来的に「詩」の本質を持っている。軽々しくすべての言語を等質にすることはできないし、それは乱暴で、かつ、もったいないことだ。ぼくもまた、ただたゆまぬ執筆と書き直しを通じてのみ、言語のなかにある美しさを再発見し、そして再現することができるかと信じている⁹。

呉の説明によれば、言語とは単なる「コミュニケーションの道具」ではなく、みな『詩』の本質を秘めており、それぞれの「本質にある魅力」が安易に等質化されないよう、また存分に引き出されるようにするには、発音に耳を傾けるべきだという。つまり、呉にとって言語は意味を伝達する手段だけではなく、それ自体音声を楽しむ目的でもある。意味は「文字」を通じて「咀嚼」できるのに対し、音のリズムや雰囲気は「感じ取り」、味わうのは発音表記にあずかるところが大きい。こうした考えの下で、呉は異なる言語の「美しさ」へのアプローチとして多言語使用という実験に挑んだものと見られる。

つまり、「〈外地〉の日本語文学」は、日本語で書かれはしても、そこから「非日本語」は決して「無造作」に排除されることはないと確認したのである。そこでは『異邦人』におけるように「異言語」は確信犯的に排除されるか、逆に、ローカル色を出すために意図的に作品中に挿入されるか、どちらかだった。ただ、私が考えたのは、多言語空間をありのままに描き出そうとして、字幕の力を借りつつ制作される映画ならいざ知らず、少なくとも小説は、ドミナントな言語の位置を崩さない、崩せないということ、要するに、複数言語使用地域を舞台にした小説のほとんどすべてが「小説の一言語使用」という原則にだけは忠実に書かれてきたということだった¹⁰。

西（2014）は「〈外地〉の日本語文学」の成立には「日本語使用者が非日本語との不断の接触・隣接関係を生きる」という背景があるにもかかわらず、ほとんどの作品では一言語しか使用しない問題を上記のように提起した。理由の一つとして、小説は映画のように字幕付きで音声を伝達する機能がないためとされるが、これに対し、安田（2014）は目取真俊の次の発言を引用しながらコメントしている。

言葉の問題というのは、書き手だけの問題ではなくして、読者の問題でもあり、編集者の問題でもあり、出版社の問題でもあります。独自の文字を持ちえなかった沖縄語には表記の問題もあります¹¹。

要するに、近代小説で一つの言語がメインに使われるのは、著者個人の意思のみならず、流通や読者など出版の仕組み全体に関わる問題ということである。二つまたはそれ以上の言語を同時に使用する作品は、実験性が高いとして評論の場では歓迎されるにしても、市場での流通性を考えると現実的とはいえない。この点は、西が取り上げたような植民地と宗主国の言語同士の場合でも、目取真が創作を試みる沖縄語のように独自の表記体系を持たない「方言」と標準語の場合でも同じだ。いずれにせよ、力の弱いあるいは読者の少ない言語は「暴力的に包摂される」宿命を受け入れるか、多大の「労力と犠牲」を払ってでも自ら別の「国語」となるか、複雑な選択を迫られると安田は指摘する。

このことを踏まえると、『自転車泥棒』における多言語使用は非常に興味深い問題を含んでいる。第一に、「ドミナントな言語」である中国語と並行して使用される言語は台湾語、ツォウ語、日本語、英語、カレン語、ビルマ語、マレー語など約7種類に達している。これだけ多くの言語の発音表記を漢字の合間に挿入することは、たとえ印刷技術的に可能でも並大抵のことではない。そこで、呉が具体的にどのような方法で「小説の一言語使用」という前提を覆して多言語空間の描出に成功したかが改めて注目に値するものになる。第二に、その空間は、必ずしも植民地におけるような緊迫感に満ちたわけで

はないが、中に戦前の「国語」だった日本語もあれば、「方言」とされる台湾語や原住民諸語の一つに属するツォウ語も存在する。それらをどう処理するかは、戦後台湾において新しい「国語」の位置づけを獲得した中国語との関係をどう捉えるかということ、そして台湾の多言語状況をどう見つめるかということにもつながるだろう。以下、この2点の問題を中心に、作品中の多言語的エクリチュールを確認しながら、そこに秘められた意図を分析していく¹²。

3 各言語の表記方法

この作品が 2010 年代の台湾をメイン舞台としていながら中国語以外の言語が飛び交う背景には、戦前から戦後まで、また日本から東南アジアまで、登場人物の経験した時代も場所も多岐にわたることが挙げられる。例えば、カレン語とビルマ語とマレー語はミャンマーやマレー半島に関する語りの中に出てくる。その合計わずかに3例のうち、例①の象の名前はアルファベット表記、例②のスローガンと例③の動物名は漢字の当て字で音声を表している¹³。

- ①在象群中，有幾頭象特別聰明，分別是象群的女長老 *Ah mong*，成熟的母象 *Ah pei*，以及一頭最年輕的小公象 *Ah mei*。(p.220)
- ②許多緬甸人民夾道歡迎，高喊著：「獨巴馬！獨巴馬！」獨巴馬的意
思是「緬甸人的緬甸」，我們也會高聲用「獨巴馬！獨巴馬！」喊回
去，那種情境讓人不明所以地激動。(p.214)
- ③他將全身的氣力貫注在眼睛上，用他鄒族獵人血統的直覺搜索，赫然
發現十公尺外，一頭馬來人稱哈利馬奧（馬來虎）的大貓正穿過樹叢
(p.189)

これらがいわゆるローカル色を示すものだとすれば、英語は逆に国際色を添えるためのものといえよう。例④のように人名や「mail」、「Google」といったポピュラーな IT 単語ならアルファベット表記のままだが、例⑤の文レベルなら中国語訳になる¹⁴。

- ④小夏給了我 Annie 的電話號碼，和她的 mail 信箱。(p.65)
- ⑤男人用不甚流利卻有自信的英文告訴我，這棵樹會「捕捉正在升往天堂的靈魂」(大概是這樣的意思)。(p.372)

一方、日本語は戦前世代に属する人物たちの第二言語であり、その影響で数多くの語彙が戦後でも使われ続けたことから、ただの外国語以上の存在感を放つても不思議ではない。しかし、そう見えない理由は、例⑥から例⑧までのように漢字や仮名が直接、もしくは注釈付きで記入される形式とは別に、中国語に置き換えられている部分があるからだ。

- ⑥這是被孩子們稱為「三角乗り」的騎車法。(p.9)
- ⑦那是一套從他學徒時代留下來的修車工具組，包括両口スパナ（開口扳手）、スポークレンチ（幅條調整器）、Torx レンチ（梅花扳手）、ペダルスパナ（踏板扳手）、チェーン切り（打鏈器）……這些工具跟著老師傅幾十年了，傷痕累累卻帶著獨特的光澤。(p.41)
- ⑧靜子問父親：「那是什麼？」父親回答：「那叫アップル（蘋果）。」(p.276)

例⑨は、語り手のバスアが入隊先の日本人少尉と会話を交わす場面である。カセットテープに入っていた録音を第三者の翻訳で書き起こしたという設定により、中国語として扱う合理性が確保されているわけだが、本来は日本語だったことがローマ字や平仮名の挿入から垣間見える。これに対し、カレン族出身の象使いビナと非日本人同士で話す例⑩の場合、「日本語がとても上手」という前置きが説明の役割を担っている。

- ⑨我跟藤井少尉說 這是一個「乾淨的月」，可以做戰祭，也可以蓋房子。我不知道為什麼，誤把 *getsu* 唸成 *tsuki*，因此藤井接話說：「對呀，這裡的月亮真是乾淨美麗 我的故鄉的月亮也美麗 不過是另一種美 我們的部隊騎著銀輪（ぎんりん），抬頭也可以看見另一個ぎんりん。」(p.146)

⑩比奈的日文很好，有一次他告訴我說：「我活著是為了有一天看到日本軍隊被魔鬼山吃掉。」我不知道比奈講這話的時候包不包括我，(p.218)

言い換えれば、日本語は当時の異言語話者が意思疎通を図るのに不可欠な手段であるものの、上記の処理が施されたことにより、近代性を代表する機械や技術用語の使用例ばかりが際立つ結果となっている。この点は、バスアの母語として録音の中に入り混じっているツォウ語についてもいえる。該当する段落の表示は、下記例⑪の、すなわち日本語とは「すでに一体化して」いて「分かつことはできない」¹⁵という説明で省かれ、最小限に抑えられている。そして、例⑫や例⑬からうかがえるように、書き出されたものの中にアルファベットによる発音表記と中国語訳を対照させながらその言語の固有性を穏やかに主張する呼称やことわざが大半である¹⁶。

⑪我漸漸發現，巴蘇亜の日語往往被用在敘事裡，而鄒族語則會在表達感情與景色的描述時出現。我本想把這兩種語言的段落特別標註出來，但想想或許不用。因為這兩種語言在講述者身上已經合而為一，鄒族的聲腔與日語的聲腔，就像山壁和風、樹以及生長其上的寄生植物，再也難以分解開了。(p.142)

⑫我們族人是楓葉的後代，新高山的子民。ak'i (祖父) 說，在遙遠的時代，Hamo (天神哈莫) 搖動楓樹，飄落的楓葉遂成為鄒族的祖先。(p.143)

⑬比奈也佩服我身上關於另一座山的知識。我跟他說，我們族人有句話說：「*na'no mani'e isi pa'mam'za no yosku* (水中被吃的青苔可看出溪魚的多寡)，*mamtanu'e pa'mam'za no yoska'auku* (從青苔上的痕跡可看出魚的大小)。」我們都是那種懂得觀察青苔的人。(p.224)

台灣語は「ぼく」の母親をはじめとする母語話者が多く登場することもあって、随所にちりばめられ、中国語に次ぐ重要な位置を占めている。表記は全て漢字を採用し、ほかの言語のアルファベットや仮名ほどははっきりではないにしろ、例⑭における括弧書き及びその中の注釈、あるいは例⑮における

「台湾語に切り替えた」という地の文を手掛かりに中国語漢字と区別することができる¹⁷。

- ⑭我媽說我八歲以前「真正歹飼」：吐奶棟 (kíng) 食、出珠 (長水痘)、生蛇 (正式的名稱應該說是帶狀皰疹)、定定跛倒 (puah-tó 常跌倒)；但八歲以後卻健壯如「鳥屎仔樹」(一種鄉下野地到處都有的雀榕)。(p.20)
- ⑮「毋是，我講的是做 (tsuè) 稻草人。」二舅國語講得不順，轉換成台語。「彼時因仔年紀猶傷細，無法度鬥相共 (tàu-sann-kāng, 互相幫忙)，但是佇稻仔結子到收割進前，阮會予大人派去『驚栗鳥仔』。就是跔 (khû) 佇田底，伸手共 (kā) 稻草人搨 (lak, 抓) 牢咧，輕輕仔搖。」(p.339)

ただし、それらは一部特殊な漢字に限ることである。字音や字義が中国語に近いものは注釈を省略される場合が多く、会話文以外で括弧なしに表示されることさえある。例えば、例⑯の「眠夢」、例⑰の「硬氣」、例⑱の「城仔内」「鬧熱」は中国語に置き換えるとそれぞれ「做夢」「堅持」「城里」「熱鬧」となる¹⁸。一見して誤植かと思われかねない台湾語漢字を直接取り入れた背後には母親から伝え聞いた話を再現する意図があっただろうが、ここに例⑱と例⑳での用例を付け加えれば、もう一つの可能性が考えられる。前者は「ぼく」が8歳の記憶で後者は中年になった現在の描写であり、「天亮」のかわりに「天光」¹⁹を使い続けていることから、そもそも中国語に台湾語を混ぜて使用するというのが「ぼく」自身の用語法の特徴だったと推測される。

- ⑯我母親則被訓練成車布邊的女工，她的美麗眼睛因為長時間注視著同一個定點，而總是像在眠夢。(p.15)
- ⑰向來對命運逆來順受的母親唯有對此事硬氣，父親也因為心底的不安而並未堅持。(p.15)
- ⑱初夏的陽光已經升起，城仔內開始要鬧熱起來，(p.16)
- ⑲我們走出診所時正好天光。但鐵馬卻不見了。(p.26)

⑳窗外已然天光了。此刻的我將會停下筆走到窗邊，用有點暈眩的腦與眼看著天空的雲和城市。(p.335)

つまり、台湾語の挿入は母親のような母語話者だけではなく、「ぼく」のような台湾語も話せるが中国語を最も得意としている、いわば二言語併用者の存在もほのめかすことになる。もっとも、この場合の二言語併用者は一般にいう二か国語を操る「バイリンガル」の華やかなイメージとは程遠く、むしろ片方が「国語」で片方が「方言」というレッテルを貼られたためそのしわ寄せを甘受してきた。学校では台湾語の使用を禁じられ、家庭に戻ると中国語を使い慣れない親世代との断絶に直面せざるを得ない。そうした本意な切り替えを強いられる言語生活が及ぼす影響の一つに、両者がまぜこぜになってしまうことがある。それを物語る役割として用意されたのが、ほかならぬ括弧などによる境界線のない台湾語表記なのである。

事実、程度の差こそあれ、登場人物のほとんどは「ぼく」と同様に二つまたはそれ以上の言語を使用している。バスアがその端的な例だが、これまでの引用で言及があった人物は全員、たとえ片言で流暢でなくても、何らかの形で別の言語を使用した痕跡がうかがわれる。彼らの言動を通してみることで、台湾の多言語性が、単に複数の言語が飛び交うという意味を超えて、それらが互いに絡み合い、混じり合うというより複雑な様相を呈していることが浮かび上がってくる。言い換えれば、中国語以外の言語を表すアルファベットや仮名、漢字は、時には括弧書きで強調され、時にはあえて「はだか」のまま中国語の行間に放り出されているのは、その混淆のありさまを表象するために呉が施した工夫であり、決して単なる表記のばらつきとしては見過ごすことができない。

4 「自転車」をめぐる各呼称

次に、本作を貫くキーワードである「自転車」²⁰という言葉の呼称に注目したい。

自分が育った環境においても、自転車という単語から地域的的属性を見出すことができる。台湾で今「脚踏車^{ジャオターチャー}」という単語が指すものを、もし「自転車^{ジテンシヤ}」と言ったなら、それは戦前台湾の日本語教育を受けた人だろう。「鐵馬^{ティーマ}」や「孔明車^{コンピンチア}」と言うなら、その人の母語は台湾語ということになる。「單車^{ダンチヤ}」や「自行車^{ズーシンチヤ}」という単語を口にすれば、おそらく中国南部からやってきた人たちだろう。もっとも今は、それぞれ交じり合って、明確な区別はなくなってきている²¹。

引用したのは作品の冒頭部における一節である。この中で「ぼく」は自転車の呼称が地域や世代ごとに異なると念を押したうえで、家族が所有あるいは関係した自転車の話を切り出していく。まず、1905年生まれの母方の祖父に関しては、下記の例^②が示すように、地の文では日本語の「自転車」、発話では台湾語の「鐵馬」が括弧なしで表記されている。上記の説明に照らし合わせれば、おそらく戦前世代と台湾語母語話者であることを示すものと思われるが、果たしてそうであるのか、似たような属性を有する人物と比べてみよう。

- ②研究日治時代庶民史の人或許會知道，彼時一台自轉車就像一部賓士車，不，就像一棟樓房，被偷的話是能被登到報紙上的要緊事，而這個竊盜新聞讓我外公一生如斯感慨：「我出世彼一年，竟然已經有人有鐵馬予人偷提（thau-theh），真正使人欣羨（him-siān）。」（p.14）
- ②這條溪流是屬於「眉溪」流域，阿雲非常喜歡「眉溪」這個名字，好像在暗示溪流是山的眉毛似的。父親總是騎著自轉車載著她，然後把車子停在林道旁的一處草叢裡，再帶著她一起進入一條南山溪上游的林道。（pp.114-115）
- ③後來他們教我騎自轉車，那是我第一次騎自轉車。我很快學會了怎麼用身體控制、感覺它。小鎌老師告訴我，要渡海打仗的話，運送大量的裝甲車和機動車輛是困難的，但自轉車相對來說就能帶上不少。自轉車輕便、快，還能夠載東西。（p.146）

例②は日本統治時代から蝶捕りを始め、1919年に発見されたシロタテハの生息地を突き止めた阿雲の父親であり²²、例③は1942年20歳の時「銀輪部隊」の一員として太平洋戦争のビルマ戦線へ動員された前出のバスアであり、二人とも祖父と同じく戦前世代に属する。そして、自転車への言及が日本語の「自転車」となっている点も共通している。

これを手掛かりに戦後生まれの若い世代の発話へ目を向けると、さらに興味深い事実が浮かび上がってくる。例えば、「ぼく」や、バスアの息子であるアッパス、阿雲の娘であるサビナがそれぞれ語り手となる例④、例⑤、例⑥では、自転車の呼称として「脚踏車」が多く使われている。例④のように「單車」と併用されることもあるが、いずれも中国語による表現である。

④有人在我耳畔問：那部腳踏車究竟到哪裡去了呢？我踩動單車的聲音終於喚起了母親，母親聽到了那個聲音，睜開眼來。（p.382）

⑤退伍的時候老鄒把那輛腳踏車送給我，我說送了我他要騎什麼？他說他腳愈來愈跛總有一天不能騎而且二高裡頭腳踏車多得是哩（p.92）

⑥為了撫養我，她常常晚上繼續做蝶畫，然後天一亮用巾巾揩著我，騎著外公的腳踏車到商場，直接把畫賣給商家。（p.238）

このように、呉は世代や言語といった属性にしたがって自転車を使い分けられていることが見受けられるが、当てはまらない例もある。それは、上述の両世代に挟まれ、戦争終結前後に幼少期を送った人物たちによる使用例である。具体的にいえば、例②の父親と例⑥の娘を持つ阿雲は、蝶産業が発展した1950年代に働き出し、終焉を迎えた70年代に亡くなったとされる。例⑦では18歳の時父親の形見の「自転車」に乗って故郷を離れたのに対し、例⑧では「單車」、「脚踏車」に乗りながら故郷の恋人で娘の実父を思い出している。実際、両者は同じものであることがのちの娘の話から分かる²³。

⑦阿雲把自己親手做的幾幅蝶畫網在自轉車的後架上，兩邊的袋子掛了一些日用品。這一年多來阿雲會私下批蝶翼回家製作蝶畫，因此存了一筆錢。她把這所有的錢放在紅包紙袋裡，放在繼母的枕頭下面，感

謝她的照顧以及當作取走父親自轉車的費用。她慶幸自己還留著父親的自轉車，騎在車座上總若有似無地聞到牛皮座椅保留的父親的汗味，那讓她安心。(pp.124-125)

- ㉘阿雲騎上單車回家，回家的路上總會有活著的蝴蝶飛過去，通常是蝶畫裡被拿來作白色顏料使用的普通種紋白蝶，這種蝴蝶是最廉價的。這時忽然一隻罕見的綠蛺蝶飛過去，她聞到了他的氣味。(略)這樣就能不想他順利騎回家了，阿雲想。只要兩顆金柑的時間。雜貨店的「曲盤」正在放歌，不知道為什麼，那歌聲好像隨著呼吸進入了騎在腳踏車上的她的身體。然後她掉了眼淚。(pp.106-107)²⁴

もう一人は例㉘で触れた静子である。台湾出身で本名林秋美である彼女は90歳を過ぎており、年齢的にバスアなどの戦前世代に近いが、現在存命中で戦後を長く経験し、「中国語の語彙が非常に多い」²⁵ことから、二つの時代をまたいで生きた一人に数えられる。自転車をめぐる彼女の思い出は、例㉘と例㉙の二つがある。前者は小学校の頃父親に動物園へ連れていかれた時、後者は20年前に元兵士の穆班長と散策に出かけた時で、およそ60年の隔たりが「自転車」から「脚踏車」への変化をもたらしたと考えられる²⁶。

- ㉙由於母親早逝，靜子跟帶大她的父親很親，騎自轉車的時候，她就像幼生的紅毛猩猩抱著他的腰，把頭靠在他背上。夏天的時候靜子可以同時聽到父親身體裡的聲音，和行道樹上蟬的鳴叫。他流汗時，靜子會聞到令她安心的氣味。(p.273)

- ㉚穆班長也會騎著那輛幸福牌腳踏車，載著她到大稻埕旁的河岸散步。在那反射著光線，流動著難以言喻色彩的河流前面，靜子反覆把他父親、一郎君、瑪小姐、勝沼先生的往事說給穆班長聽，就像一場在床褥間反覆溫習的夢境。(p.297)

最後に取り上げなければならないのは、物語の中心人物で生涯3台自転車を所有した「ぼく」の両親の例である。1台目の紛失は「ぼく」が生まれる14年前にあたる1960年代であり、2台目はそれから16年経った1970年

代であり、そして3台目は一家の住む中華商場が解体され、その翌日に父親が失踪した1993年であった。順に例⑳、例㉑、例㉒を並べると、主に父親が利用するその乗り物は最初に「鐵馬」と呼ばれていたものが、そのうち「腳踏車」と言い直されていることが一目瞭然になる。

- ㉑沒有人知道為什麼那天我父親沒有騎著鐵馬載五姐到車站，而是選擇抱著她走去，那或許也暗示出他的遲疑吧？(p.16)
- ㉒哥重考放榜那天，爸一清早起床，獨自騎著腳踏車去載貨，然後就到中山堂等看榜。(p.171)
- ㉓而在爸失蹤前，我們都已經發現，他正在迅速地忘記一切，他會把準備要做的事寫在日曆上，然後預先丟在門口。這麼一來只要開鐵門，就會先注意到日曆上寫了什麼。他也會騎著腳踏車出去，一整天都不見蹤影，最長的一次是三天才回來。(p.201)

母親の場合ももっと複雑だ。まず、子供の頃空襲に遭った例㉔と、結婚後5番目の娘を養女に出す寸前の夫を止めた例㉕では、「自転車」と「鐵馬」の違いが前述の祖父の例を彷彿させる。一方、台湾語によるもう一つの呼称「孔明車」も例㉖のように発話の中にしばしば現れる。さらに、「中国語がほぼできない」²⁷にもかかわらず、「腳踏車」という表現を使うこともある。例㉗はいつの出来事なのか不明だが、例㉘は「ぼく」が8歳の頃一度盗難被害から戻ってきた3台目まつわる話であると特定できる。

- ㉔她掙扎爬起，發現前面眼前有一輛黑黝黝的自轉車，一定是這輛車絆倒她的。她看過日本警察騎自轉車追人，好好好快，如果騎上那個，一定可以很快回到村莊。(p.8)
- ㉕據我母親說 那是她一生第一次騎鐵馬，也是最後一次。(但肯定她記錯了，或者我懷疑她刻意不提那真正的第一次經驗。)(p.16)
- ㉖母親遲疑了一下，說：「我問過伊呢。伊講彼個人是伊去日本時的同學，想講孔明車就轉來囉、煞煞去。」(p.263)
- ㉗她說這是她一生從我父親那裡得到的、最貴重的一件禮物，是他騎著

腳踏車，到仁愛路上的資生堂買的。(p.57)

- ㉞彼時媽到開漳聖王的乩童那裡詢問腳踏車的下落，聖王公用很古雅的台語說：「不然且回依舊路，雲開月出兩分明。」桌頭解釋，意思是腳踏車會回到原來的地方。(p.172)

そもそも人はみな地域や年齢など複数の属性をもっており、それらによって使用する語彙がさまざまに規定され、発話の意図やその背後に想定される理由も一つとは限らない。人間が同じ意味で指示される事物や事態を状況に応じて言い換えることは当然といえば当然だが、以上の4人の「自転車」の使い分け方には、それぞれ時間の推移を伴って変化する傾向がうかがえる。すなわち、遠い過去の時点の発話においては「自転車」や「鐵馬」、現在に近い時点においては「腳踏車」が多用されているということである。本節冒頭の引用における強調——「もっとも、今はそれぞれ交じり合って、明確な区別はなくなってきている」——が、こうして具体的に示され、さらに別の意味を含んでいる。つまり、登場人物の属性による発話の区分は明確でなくなるばかりか、「自転車」も「鐵馬」も「孔明車」も使用されなくなり、若い世代がこぞって使う「腳踏車」に収斂していくのである。

とくにこの「鐵馬」という言葉の美しさたるやどうだ。大自然と人為の力をみごと結合させている。創造主が地中に残した鉄の石が人類によって掘り出され、溶かされて真っ黒な鋼に変じて、最後は一頭の馬となる——この言葉はそんなプロセスをだれにでも想像させてくれる。でも、美しいものは往々にして、美しくないものによって取って代わられる。世界はそんなものだ。鐵馬は自転車や腳踏車になった。ぼくからしたら、それは愚かしい文化的後退でしかない²⁸。

この一節が示しているように、そうした変化を呉は決して快く受け止めていない。むしろ上記のように語り手「ぼく」の口を借りて「美しいもの」が「美しくないもの」に取って代わられた、一種の「愚かしい文化的後退」として否定的な見解を示している。その理由は、それらの変化が、自然発生的

なものというよりも、人為的に操作された結果だったからだ。日本統治時代に「自転車」と呼ばれて持ち込まれたその高価な贅沢品は、台湾語を話す人々の目には進歩や知恵を象徴する「鐵馬」、「孔明車」と映っていた。しかし、戦後中国国民党政府の「国語運動」の下ではどちらの表現も公の場で使用禁止となり、かわりに「脚踏車」「單車」が浸透するようになる。この一連の過程は、かつての「国語」が新しい「国語」に取って代われ、また「方言」が「国語」によって抑圧された過程にほかならない。この点において、題名の「自転車泥棒」は、自転車そのものだけではなく、それを指す「言葉」たちも「泥棒」に遭い、失われていったという意味を含んでいる。もっといえば、呉が自転車の行方を通して追いかけて追いかけているのは、ここ百年間台湾がたどってきた歴史とともに、その波に揉まれるさまざまな人や生き物、そして言葉である²⁹。丁寧に蘇らせられるその一つ一つの言葉が、戦争や外来者による統治の傷跡を如実に語り継ぎ、作品を読み解くうえで重要な鍵を握っているといえる。

5 結論

本稿の目的は、多言語、多文化の共生を模索する途中の台湾において、文学作品がどのように言語を扱うのかを考察することである。公用語の一元化を強いられた戦前から戦後の1990年代までの時期についてはまた稿を改めて論じる必要があるが、今回は「本土」意識の台頭につれて多様性に対する寛容さが増す近年に発表された『自転車泥棒』を取り上げることにした。この作品は、これまでファンタジーの要素を融合するネイチャーライティングで知られる呉明益が歴史にフォーカスし、厳しい時代を生き抜いた人々の記憶を交錯させながら描き出したものである。スケールが大きいストーリーに加え、主要言語である中国語を含め、計8種類の言語が使用、言及されていることが話題を呼んだ。

まず、最初のアプローチとして言語ごとの表記方法を検討してみた。その結果、発音や意味が中国語に変換されるカレン語とビルマ語とマレー語を除き、ほかの言語はいずれも原語のまま挿入されていることが分かった。具体的にいえば、英語はアルファベットで、日本語は漢字や仮名、ローマ字であ

る。そして、これまで正書法が確立されてこなかったツォウ語と台湾語はそれぞれ公式推奨のアルファベットと漢字を採用している。ただし、台湾語以外は大半が単語レベルにとどまり、かつ補足説明などにより出現を最小限に抑えられているため、一度で大量の表記を見ずに済む。これは、読みやすい体裁を整える上での一つの工夫と捉えることができよう。

一方、なぜそんなに多くの言語を取り入れたかについては、二つまたはそれ以上の言語を併用する人物の存在をほのめかすためではないかという結論に至った。ここでいう併用とは、複数の言語を別々に操るというよりも、むしろ片方はメインで片方は片言だけでも混じり合って話すということを指す。日本語とツォウ語、台湾語と日本語、中国語と英語、さまざまなパターンがある中で特筆すべきなのは中国語と台湾語である。同じく漢字を使用するため見分けにくいのだが、括弧書きの省略によって巧妙に結合している。この点において、本作に映し出された台湾という多言語空間は言語同士が鮮明な境界線を持たないで混沌と混ざり合うさまを表象した興味深いものだといえる。

次に注目したのは、物語の主軸となる「自転車」をめぐる多様な呼称である。試しに分類したところ、戦前世代には日本語の「自転車」、台湾語母語話者には「鐵馬」や「孔明車」、戦後世代には中国語の「脚踏車」や「單車」など、年齢や言語の属性によって使い分けられていることが明らかになった。また、異なる呼称が混在する場合でも、「自転車」あるいは「鐵馬」から「脚踏車」へといった時系列的変化が読み取れた。こうした細かい設定を生み出す背景には、戦前と戦後における二つの「国語」の入れ替わりと、戦後「国語運動」の中における「方言」の排除がある。つまり、その不統一さと変化の目まぐるしさは、言語同士のせめぎ合いを浮き彫りにするために意図的に仕組まれたものと考えられる。

最後にまとめると、本稿で取り上げた二つの問題のうち、一つは多言語の解放を匂わせるのに対し、もう一つは逆にそれまでの抑圧を物語っている。このように見事なまでに多言語共生の課題を問いかけたこの作品の存在自体が、その最たる象徴だ。作者は中国語以外の言語表記に対し、中国語による注釈を付け加えたり、あえてつけなかったりする。一言語使用の原則に反し

ていながら名実ともに高い評価を得ているのは、その多言語的エクリチュールに違和感ないばかりか、共感すら覚える読者が台湾に多いからこそできたことではないだろうか。この点から、台湾文学の多言語性及びそれに対する受容が進み、今後も目が離せない展開になりそうだ。

注

¹ 詳しくは中国語版呉 (2016) に収録された王 (2016) と日本語版呉 [天野訳] (2018) の訳者あとがきを参照。なお、テキスト内の言及は、呉 (2016) p.173 と呉 [天野訳] (2018) p.189 を参照。

² 呉 [天野訳] (2018) によると、2015年の初版から日本語訳版が刊行された2018年10月まで、台湾では文学作品として異例の3万部を販売したという。詳しくは同書 p.429 を参照。

³ ブッカー国際賞とは、世界的に権威あるブッカー賞が2005年からイギリスで出版された英訳作品を対象に設立したものであり、翻訳を奨励するという目的から原著者と翻訳者が共同受賞することになっている。

⁴ Wu; Translated by Sterk (2017), pp. 373-374。日本語訳は引用者による。

⁵ 風傳媒ウェブページ「羅馬拼音搞定台語、日文、鄒族語 單車失竊記英譯者：讓讀者認識台灣是多語國家」(2018-4-12) を参照。

⁶ 呉 [天野訳] (2018)、p.437。括弧は原文、以下同。

⁷ 同上書、p.438。

⁸ 中国語原文と英訳、日本語訳の異同に関する検討は本稿では行わないが、翻訳の非対称性及び等価の問題については、Venuti (1992, 1995) を参照されたい。

⁹ 呉 [天野訳] (2018)、p.423。

¹⁰ 西 (2014)、p.107。

¹¹ 安田 (2014)、p.147。

¹² ジャック・デリダのいう「エクリチュール」には「散種」すなわち意図せざる多義性という意味も含まれているが、本稿では作者が言語の音韻体系の多様性やほかの言語による記述不可能性をいかなる戦略で書き出すか、その「書き方」の意味として使用する。

¹³ 表記方法を検討する目的にしたがって、用例は中国語原文を引用することとした。アルファベット書体や括弧は原文、ページ数は呉 (2016)、以下同。なお、用例の日本語訳は本稿末尾に列記しておく。

¹⁴ 全体的に見れば、ほかの言語がイタリック体であるのに対し、英語のみ立体活字を採用しているという傾向があるが、厳密に使い分けがなされている

わけではない。

15 呉 [天野訳] (2018)、p.157。

16 ツォウ語の表記は台湾教育部が 2005 年に公告した文字表記法「原住民族語言書寫符號系統」に準拠していると思われる。

17 用例から、文字表記は台湾教育部が 2007 年から 2009 年までの間公告した「臺灣閩南語推薦用字」合計 700 字に、発音表記は同部が 2006 年に公告した「臺灣閩南語羅馬字拼音方案」にそれぞれ準拠していると思われる。なお、これらをベースに、オンライン版『臺灣閩南語常用詞辭典』試用版が 2008 年に、修正版が 2010 年に公開されている。

18 発音と意味を番号順に並べると、⑩は「bîn-bāng (夢を見る)」、⑪は「ngē-khì (意固地)」、⑫は「sīng-á-lāi (街中)」「lāu-jiat (賑やか)」である。なお、発音は前注の『臺灣閩南語常用詞辭典』を参照。以下同。

19 「天光」は「thinn-kng」と発音し、「夜が明ける」を意味する。

20 煩雑を避けるため、これ以降日本語の漢字表記を強調する以外は括弧表記を省略することとする。

21 呉 [天野訳] (2018)、pp.16-17。「鐵馬」のルビは引用者による。なお、日本語訳では自転車の異なる呼称を鉤括弧で括弧表示しているが、中国語原文では鉤括弧が付いていない。

22 シロタテハは中国語で「白蛺蝶」といい、台湾南投國姓郷北山坑で発見され、1919 年松村松年によって公表された。その一部の経緯については、呉 (2016) pp.108-110 及び新故郷文教基金會【蝴蝶風】ウェブページ「白蛺蝶追蝶戦」を参照。

23 例⑮を参照。

24 「他」という文字の太字は原文。

25 呉 [天野訳] (2018)、p.291。

26 もっとも、例⑲と同じく父親との思い出に触れる時に「脚踏車」を使用している箇所がある。「而只要沒有公務，靜子的父親就會騎著他的脚踏車，讓她坐在運貨架上，從台北鐵橋出發，穿過大龍峒町轉進圓山町（そして仕事さえなければ、父はそれを叶えた。彼女を自転車の荷台に乗せて、台北鉄橋を出発し、大龍峒町を抜けて、円山町へと進む）」と。原文は呉 (2016) p.273、日本語訳は呉 [天野訳] (2018) p.297 を参照。

27 呉 [天野訳] (2018)、p.291。

28 同上書、p.17。

29 生き物の例として、ビルマのジャングルから運ばれてきた象や台湾の高山に生息していた蝶が挙げられる。

用例日本語訳

呉 [天野訳] (2018) による。ルビや傍点、記号などは原文。ページ数は同書。なお、一部原文と異なる箇所があるが、ママとした。

- ①群れには、特に頭のいいヅウがなん頭かいた。メスのリーダー「アーモン」と大人のメス「アーペイ」、そして子どものオス「アーメイ」だ。(p.240)
- ②たくさんのビルマ人が道まで出迎えてくれた。「ドバマ！ドバマ！」その意味は「ビルマ人のビルマ」だ。私たちも、「ドバマ！ドバマ！」と返した。そんな光景に、理由もない感動を覚えた。(p.234)
- ③彼は全身の意識を束ね、眼球に集めた。ツォウ族のハンターとして貰い受けた血が、直感でそれを見つけた。一〇メートル先の樹間をたしかに、マレー語で「ハリマオ」と呼ばれるマレートラが駆け抜けた。(p.207)
- ④ナツさんがぼくにアニーの電話番号とメールアドレスを渡した。(p.75)
- ⑤男は、流暢ではないが自信満々の英語で、これが「天国へ向かう魂を捕まえる」樹だ、と言った（だいたいそういう意味だったろう）。(p.406)
- ⑥それは子どもたちが「サンカクノリ」と呼んでいる乗り方だった。(p.14)
- ⑦先生が指さしたのは、彼が見習い時代から使っていた道具一式だった。なかには両口スパナ、トルクスレンチ、スポークレンチ、それからペダルスパナ、チェーン切り……。数十年のときを共にして、傷だらけだが独特のツヤが出ている。(p.52)
- ⑧静子は訊いた。「あれはなに？」父は答えた。「アップルだ」(pp.300-301)
- ⑨私は藤井少尉に言った。「これはきれいな月です。戦いの祭りをを行うことも、家を建てることもできる」私が「今月は」と言わなかったせいか、藤井さんはこう答えた。「そうだな。ここの月はきれいだな。私の故郷の月もきれいだが、また別の美しさがある。我々は銀輪に乗る部隊だが、ここで見上げればまたひとつの銀輪がある」(p.161)
- ⑩ピナは日本語がとても上手で、私に向かってこんなことを言ったことがある。「いつの日か、日本軍が悪魔山に食われるのをこの目で見るために、俺は生きている……」ピナが言う「日本軍」に、自分が含まれているのかわからないのか、私には分からなかった。(p.238)
- ⑪バスアの日本語はものごとを説明する部分によく用いられ、いっぽうツォ

ウ語は感情表現や風景描写によく出てくるのがわかってきた。最初は段落ごとにどちらの言語か表示するつもりでいたが、なくていいという考えになった。なぜなら、この語り手において、ふたつの言語はすでに一体化していたから。ツォウ語の響きと日本語の響きはまるで山肌と風のように、あるいは樹木と寄生植物のように寄り添い、もはや分かつことができない。

(p.157)

- ⑫私たちが部族は、落ち葉の末裔だ。新高山にいたかやまの子孫だ。アック・イ（祖父）が言うには、はるか遠い昔に、ハモ（空の神）がフウの木を揺らし、そのとき落ちた葉がツォウ族の祖先となった。(p.158)
- ⑬ピナは、私が身につけていた山の知識に感心していた。私は彼に教えた。「ナッノ マンイエイシ バمامザ ノヨシュク（水のなかで、食べられた水苔を見れば、魚がどれだけいるかわかる）」「مامターヌ バمامザ ノヨシュク アウル（水苔の食べかたから魚の大きさがわかる）」私たちはどちらも、水苔が読める人だった。(p.245)
- ⑭母が言うには、八歳になるまでのぼくは、本当に育てにくい子どもだったらしい。母乳は飲まないわ、食べ物の好き嫌いが激しいわ。「玉」のような水ぼうそうや「蛇」のような帯状疱疹が出るわ、年がら年中転ぶわ……。でも八歳になると突然、「鳥の糞から生まれた木」（田舎ならそこらじゅうに生えているガジュマルの仲間だ）みたいに元気になった。(p.27)
- ⑮「違う。自分でカカシになった」おじは中国語が流暢でなかったから、台湾語に切り替えた。「あのころ、おさなじっこが集まっても、小さすぎて野良の手伝いはできない。でも稲が結ぶころには、大人に言われて、いっしょに『スズメッコ』を追いかつた。田んぼの底にしゃがんで、ぎゅっと握ったカカシの棒をやさしく揺らす」(p.369)
- ⑯母は布端の始末を担当する針子さんだった美しい瞳まなこを持っているのは、きっと作業中、生地と同じ場所を見つめ続けていたからで、だから母はいつも夢を見ているようだった。(p.20)
- ⑰母は初めて運命に抗あらがった。父は内心後ろめたかったのか、その約束を蒸し返さなかった。(p.21)
- ⑱初夏の太陽はとっくに顔を出し、町は活気にあふれていた。(p.21)

- ①9ぼくら三人が診療所を出たとき、空はもう明るく広がり、そして鐵馬は消えていた。(p.33)
- ②0窓の外はもう明るくなっていた。ぼくは執筆の手を止め、少しぼんやりした脳と目を凝らして、空と雲と街を見ていた。(p.365)
- ②1日本統治時代・台湾の大衆史研究者には自明だろうが、あのころの自転車は今のメルセデス・ベンツ——いや、一戸建ての家に匹敵するほどの価値があり、盗まれたら当然、新聞に載るほどのおおごとだった。だからこの盗難事件は祖父の頭にこびりついて生涯にわたって剥がれぬほどの感慨を持たせた。「オレが生まれたあの年、鐵馬を盗まれる金持ちがもういたんだ。心底うらやましい」(p.19)
- ②2そこは「眉溪」水系の支流だった。水の流れが山に描かれた眉毛に思えたから、アフン(阿雲の台湾語発音——引用者注)はその名が好きだった。父はいつも彼女を自転車に乗せて走った。そして林道そばの草むらに自転車を置き、南山溪の上流へ細道を踏み入っていく。父によれば、山の猟師が数人知るだけの獣道だという。それは同時に、アフンの父しか知らないチョウの道だった。(p.129)
- ②3その後、彼らは私に自転車の乗り方を教えた。初めてだったが、私はあつという間には体を通じて自転車を感じ取り、動かす方法を会得した。小鎌先生が言うには、海を越えて戦争に行くとき、装甲車や輸送車を大量に海上輸送することは難しい。でも自転車ならよりたくさん積める。自転車は軽く、速く、さらに軍需品の運搬もできる。(p.162)
- ②4ある人が、ぼくの耳で訊いてきた。あの自転車はいったいどこへいくんだろう？ぼくが自転車のペダルを踏む音がようやく、母に届いた。母はその音を聞き取り、その目を開けた。(p.417)
- ②5ラオゾウは、兵役を終えた私にあの自転車をプレゼントしてくれた。くれたら乗る自転車がなくなるじゃないか？と訊くと彼は、足が悪くなってどうせいつかは乗れなくなる。それに、二高村には自転車がたくさん余っているじゃないか。そう答えた。(p.105)
- ②6私を育てるため、母は夜も、チョウの絵の内職をした。朝になればおんぶ紐で私をおぶって、(祖父の自転車に乗って——引用者注)商場へ出かける。「直で」特産品へ卸すのだ。(p.259)
- ②7アフンは自分で作ったチョウの貼り絵をなん枚か、自転車の荷台にくくりつけた。左右に下げた袋には日用品を入れた。この一年、こっそりチョウ

の翅を仕入れて、家で製作した。だからお金も少し貯まった。そのお金はそっくり継母の枕の下に置いてきた。世話をしてくれた彼女への感謝と、乗っていく父の自転車の代価のつもりで……。父が自転車を残してくれたことをアフンは言祝いだ。出発したあともずっと、そこはかたなく牛草のサドルから父の汗の匂いを感じ、安心した。(p.140)

- ⑳自転車で乗って、アフンは家路についた。その途中、いつも生きたチョウが飛んでいた。貼り絵で白色となる、普通のモンシロチョウだ。値段がいちばん安い。そのときふいに、希少種のタカサゴイチモンジが一羽、飛んできた。彼女は彼の匂いを嗅いだ。(略) これで「彼」のことを忘れて、帰宅することができる。アフンはそう考えた。たった、飴ふた粒の時間だけだけれど……。よろずやのレコードが鳴っている。なぜかわからないけれど、その歌声は、自転車を漕ぐ彼女の体内へ呼吸と一緒に沁み込んでいくようだった。そして彼女は、涙をこぼした。(pp.119-120)
- ㉑静子は母を早くに亡くしていたため、日頃世話をしてくれる父との関係は良好だった。自転車で乗るとき、幼いオランウータンみたいに父の腰を抱き、背に頭を押し付けた。夏だったら、父の体内の音と、街路樹のセミの鳴き声が同時に聞こえた。父が流す汗の臭いは、彼女を安心させた。(pp.297-298)
- ⑳ム一隊長もときにあの幸福自転車で彼女を乗せて、大稲埕の河畔へと散歩に出かけた。光を浴びて、言葉にできぬ色を作って流れる川面を前に、静子は繰り返し、父や一郎、マーちゃん、そして勝沼さんとの思い出を、ム一隊長に話した。まるで寝床で宿題をくり返しやり続ける夢を見ているように。(p.324)
- ㉒父はどうして自転車でなく、歩いて駅へ行ったのか？その理由はだれにもわからない。もしかするとそれは、父の迷いのあらわれだったのかもしれない。(p.22)
- ㉓一年後、試験の結果が出る日、父さんは朝一番で自転車で乗って出かけた。仕入れをすませたあと中山堂に寄り、発表を待ち構える。(p.186)
- ㉔失踪する前、父がなにもかもを忘却しつつあることに、家族は気づいていた。やるがあったとき、父はまず店の入り口にある日めくりカレンダーに書いておいた。そうすればシャッターを開けるときに、その日になにをするかがわかる。いっぽうで、父は自転車で乗ってでかけ、丸一日帰ってこないこともあり、ひどいときはそのまま三日間、家を空けた。(p.220)

- ③④そして這い上がると、そこに黒い自転車があることに気づいた。自分はきっとこの自転車につまず躓いたんだ。少女はいつだったか、日本人警察官が自転車でだれかを追いかけているのを見たことがあった。とても速かった。これに乗れば、あっという間に、村へ戻れるに違いない。(p.13)
- ③⑤それは母が生まれて初めて自転車に乗った瞬間で、かつ二度と乗ることはなかったと本人から聞いた(そりゃもちろん、母の思い違いだろう。さもなくば、最初に乗ったあの日のことを意図的に忘却しているか、だ)。(p.22)
- ③⑥母は少し考えて、言った。「父さんに訊いたことがあるよ。そしたら、あの盗っ人は日本にいたときの同級生だったから……孔明車も戻ってきたんだ。もういい、って」(p.286)
- ③⑦彼女は、そのコンパクトが父から貰ったものでいちばん大事にしていると。言った。父は自転車で、仁愛路の資生堂まで行き、買って来た。(pp.68-69)
- ③⑧母さんは、開漳聖王にお参りし、境内の「神落とし(乩童)」に自転車の行方を占ってもらった。聖王さまは古式ゆかしい台湾語でこう言った。「さもなくば、かつての道をたどれ。雲が開き、月が現れ、それは明らかになるであろう」かたわらの「机読み(桌頭)」が解説を加えてくれた。つまり、自転車は元の場所に戻ってくる、というのだ。(p.188)

参考文献

(日本語)

呉明益 [天野健太郎訳] (2018) 『自転車泥棒』 文藝春秋。

菅野敦志 (2012) 『台湾の言語と文字——「国語」・「方言」・「文字改革」——』 勁草書房。

陳培豊 (2012) 『日本統治と植民地漢文——台湾における漢文の境界と創造——』 三元社。

西成彦 (2014) 「小説の一言語使用問題——中西伊之助から金石範まで——」 『立命館言語文化研究』 25 巻 2 号、pp.107-126。

安田敏朗 (2011) 『かれらの日本語——台湾「残留」日本語論——』 人文書院。

安田敏朗 (2014) 「コメント(2): 方言・ルビ・パイリンガリズム」 『立命館言語文化研究』 25 巻 2 号、pp.147-156。

林初梅 (2009) 『「郷土」としての台湾——郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容——』 東信堂。

(中国語)

王徳威 (2016) 「小説『即物論』——吳明益《單車失竊記》及其他——」『單車失竊記 (新版)』、台湾、麥田出版、pp. I-XVI。

教育部國語推行委員會編輯『臺灣閩南語常用詞辭典』網路版、
https://twblg.dict.edu.tw/holodict_new/default.jsp

吳明益 (2016) 『單車失竊記 (新版)』台湾、麥田出版。

新故郷文教基金會【蝴蝶風】ウェブページ「白蚊蝶追蝶戦」、
http://bw.homeland.org.tw/ecology/ins.php?index_id=207&index_m_id=54
(参照 2019-12-19)

風傳媒ウェブページ「羅馬拼音搞定台語、日文、鄒族語 單車失竊記英譯者：讓讀者認識台灣是多語國家」、2018-04-12、

<https://www.storm.mg/article/423473> (参照 2020-01-16)

(英語)

Venuti, L. (1992). *Rethinking Translation: Discourse, Subjectivity, Ideology*. London: Routledge.

Venuti, L. (1995). *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. London: Routledge.

Wu Ming-yi; Translated by Sterk, D. (2017), *The Stolen Bicycle*. London: The Text Publishing Company.

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP18K00507 の助成を受けたものである。